

ラグジュアリーの羅針盤

COMPASS OF LUXURY

人間は太古の昔より、ラグジュアリーを必要としてきました。

時代により、文化により、また個人の知覚により、何をラグジュアリーとみなすかは異なり、世界で一致した定義はないのですが、へた迷惑で、時代や人を輝かせる豊かなものであったことは、ほぼ共通しています。時代の変化の要請に合ったラグジュアリーが新しい文化をつくり、次の時代を導いてきました。

後世に語り継がれるオリジナルな生き方

1980年代の終わりから1990年代に、グローバル資本主義が発達し、ヨーロッパが支配力を持つラグジュアリー・コンクローマリットが形成され、ラグジュアリーといえば富裕層を対象とする付加価値の高い高級品ビジネスとらえられているのが現状です。しかし、そのような産業はただかこの30年ちよつとで形成されたものにすぎず、しかも、時代の大きな変わり目となる現在、ラグジュアリーが意味するものは急速に変わりつつあります。近未来のあるべき社会、こうあってほしい文化にふさわしいラグジュアリーとは何なのか、あらゆる角度から可能性を探っていくと試みるのがこの連載のテーマです。

さて、早速ですが、ラグジュアリーの反対語は何でしょうか？
デザイナーのココ・シャネルは、「バルガー」と言います。卑俗とか下品と訳されますが、自分ではないものになるうとすること、美意識を欠いていること、というニュアンスがあります。

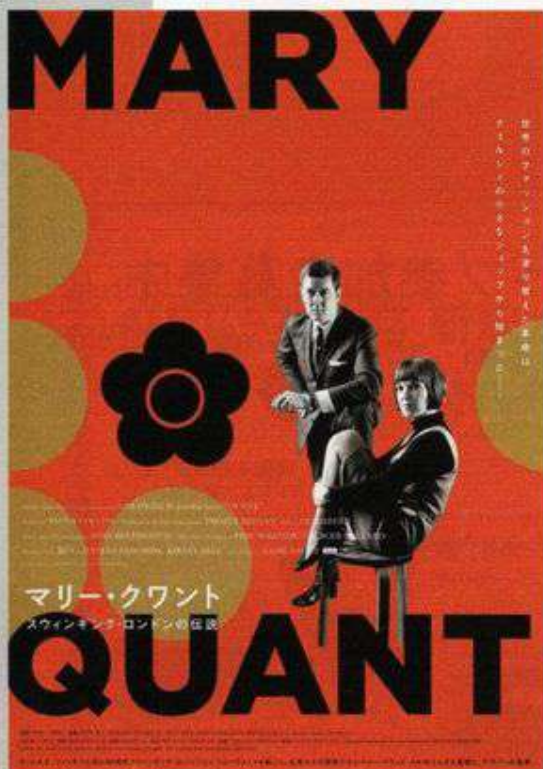
そう書くと、バルガーという語の悪いイメージが際立ちますが、必ずしもそうではないのが面白いところなのです。1960年代にミニスカートを発明したデザイナー、マリリー・クワントは、こう言います。「よい趣味なんて死んだも同じ。バルガーであることこそが人生よ」。シャネルは膝を「醜い」とみなしてミニスカートを嫌いましたが、クワントは、不作法で下品とされた

膝を出し、ミニスカートを大流行させ、世界を制覇します。変えたのは丈だけでなく、ヘア、メイク、シヨートのやり方、モデルのあり方、写真、広告、インテリア、女性観、社会に向き合う態度まで。その結果、生まれた新しい文化は、時代そのものを大きく変えました。下品さを嫌い、20世紀のラグジュアリーの新しい基準を作ったココ・シャネル。

下品とされるものを利用し、その固定観念を打ち破って時代を変えたマリリー・クワント。

対極のような考え方からスタートし、まったく違う方向のファッションで成功した二人のデザイナーですが、共通することがあります。自分の感覚や願望に忠実に生き、世の中の慣習が自分と合わないと思えば従わず、価値観を転覆して女性が生きやすい新しい世界を切り開いたこと。二人とも、後世に語り継がれるオリジナルで豊饒な人生を生きています。「羅針盤」のヒントはこのあたりにもありそうです。

「マリリー・クワント・スウィング・ロンドンの伝説」
11月26日(土)、Bunkamuraル・シネマほか全国順次ロードショー！



中野香織

富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆を行うほか企業の顧問を務める。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書多数。展覧会翻訳監修を務める「マリリー・クワント展」が11月26日から来年1月29日まで東京・Bunkamuraザ・ミュージアムで開催されるとともに、翻訳監修を担当した公式図録「時代を変えたミニの女王マリリー・クワント」(グラフィック社)が発売。



11月26日からマリリー・クワントの展覧会、映画、図録本が同時に展開される。写真は映画の公式ポスター